

### 地元・郷土研究への誘い：法政大学市谷 キャンパスの地元、江戸城外濠を例に

石神, 隆 / ISHIGAMI, Takashi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of humanity and environment / 人間環境論集

(巻 / Volume)

17

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

2017-02-28

解説

## 地元・郷土研究への誘い

— 法政大学市谷キャンパスの地元、江戸城外濠を例に —

石神 隆

はじめに

「若きわれらが命のかぎり、ここに捧げて（ああ）愛する母校、見はるかす窓（の）富士が峰の雪、蛍集めむ門の外濠、よき師よき友つどい結べり」で始まる法政大学校歌は、昭和4年、同大学に奉職していた叙情詩人佐藤春夫により作詞されたものである。法政大学は明治22年に神田駿河台から麴町区富士見町6丁目へ移転、さらに大正10年に外濠土手沿いの現在地に移動した。はるか遠く富士の白雪と、間近に光る外濠の蛍という自然環境豊かなキャンパスで、まさに「蛍雪の功」の勉学に励む苦学生たちの姿を、遠近法で見事に表現している。

『外濠 - 江戸東京の水回廊 -』という一冊の本がある。法政大学エコ地域デザイン研究所が、一つの地元・郷土学として編集した外濠に関する総合的な研究書である。第1章・外濠のなぜ、第2章・外濠を知る、第3章・外濠をみる、第4章・外濠の未来、の順で、執筆者、寄稿者、地元人インタビューなど総勢50余名が制作に関わっている。この本の下地になったのは、同研究所が文科省学術フロンティア推進事業の採択を受け5年間にわたって進めてきた水辺都市の基礎研究であり、同時に4年間にわたり助成を得た千代田区の地域研究支援スキーム「千代田学」による外濠研究である。かなりの時間と労力をかけた、大学による地元フィールドワークの集大成の一つといってもよい。（注1）

## 地元・郷土を知ること

地域研究のスタートの第一歩は、まずは身近な場所、自らの地元を知ることからであると思う。自分の地域を知り、自分が主体的に地域にかかわっていく中で、地域をより深く考えていこう、という意味合いを持った「地元学」という言葉がある。あるいは以前から使われていた、生活圈規模の範囲で地域のことを知ろうという「郷土学」という言葉もある。かつては「地方（じかた）学」という言葉もあった。それぞれ使われ方や使う人によってニュアンスは異なるが、人間と土地・自然の関係を探るなかで、人間の姿や社会の姿、またそのありようを考えていこうという面も含まれているとみられる。後者「郷土学」はもともと、日本での郷土や地方研究の一部が農政研究の視点からスタートしたこともあり、田園社会あるいは農山村を対象としたケースが多い。（注2）

地元ないし郷土とは、言葉の意味からいえば、まずは個人の生まれ育った土地のことである。敷衍すれば、期間の長短にかかわらず自己と深く関係した場所も自分の地元や郷土ととらえることができよう。なぜなら、地元ないし郷土という言葉の背景には、それが自己の思考や生き方など人間形成に大きな影響を与えるものであるという地人関係における「場」の共存在の概念が深く籠められているからである。われわれ現代人のほとんどは都市民であり、大都市で生まれ、大都市で育つのも今や大多数で普通の姿になっている。そこで、現代の地元学あるいは郷土学を、大都市東京との関係で考えるのもまた自然な姿である。東京でも、それぞれの生活圈としての小範囲においては、人と土地・場所との関係でのいわゆる地元的あるいは郷土的要素が多分にあるものである。東京のような大都市でも、一つひとつの地域をみれば、まさに地方であるといえる。

多感な年代に大学生活を送るキャンパスとその周辺地域は、学生また卒業生にとって大いなる地元あるいは郷土といってもよい。それほどまでに大学の立地やキャンパスのあり方は重要であると思われる。上記のような地人関係の文脈で考えれば、地元あるいは郷土である大学キャンパスの周辺環境を知るといのは、実は自己を知ることと等しい部分があろう。それは、より濃密なキャンパス環境との関わりにつながり、学生生活、さらにその後の人生をいっそう豊かにするきつ

かけとなるかもしれない。キャンパス立地の場所の特質や歴史、意味を深く知り、あるいはその場所と関係するなんらかの活動につなげていく、学校の地元・郷土学というものがより活発になってもいいと思われる。本稿では、その一例として、法政大学市谷キャンパスの立地する場である江戸城外濠を例に、地元・郷土研究への誘いをしてみたい。

## 法政大学の地元、外濠、多摩川水系

外濠の開削は1636年であるから、既に400年近い歴史をもっている。江戸城の防御装置としてはじまった外濠は、現代の東京に豊かな水と緑の空間を提供している。内濠が江戸氏の時代に江戸城として自然地形をほぼそのまま利用して造られたのに対して、外濠は徳川氏の時代になっての大土木工事により造られたものである。大規模な濠を維持する水源として自然河川だけではならず、ほぼ同時期に完成した玉川上水の水を四谷の旧大木戸で取り入れ豊かに水を湛えた濠が完成している。玉川上水の水はいうまでもなく多摩川からである。多摩川の水はこの玉川上水から外濠を通して神田川とつながり、隅田川に流れ、さらに荒川、利根川ともつながっていた。大都市江戸の壮大な水循環の成立である。この要となる位置が、現在JR市ヶ谷駅から飯田橋駅間に残された、市谷濠、新見附濠、牛込濠であり、まさに法政大学市谷キャンパスの立地点そのものである。

このかつての玉川上水を市谷キャンパスから上流に遡っていくと、小金井キャンパスの近くを通り、三鷹の法政大学校地を辿ることになる。途中で府中の校地も存在する。とりわけ三鷹校地である法政大学中学高等学校（三鷹市牟礼）の立地は玉川上水直近である。さらに玉川上水の水源である多摩川とのつながりで見れば、広い敷地の一部がその源流部分ともみなされる多摩キャンパス、そして一方では、多摩川から取水された二ヶ領用水が校舎の前面を通る第二中学高等学校（川崎市木月）にも連なっている。外濠－玉川上水－多摩川－二ヶ領用水と、法政大学の6つの校地が期せずして水系でつながっていることはある種の驚きでもある。さらに広くみれば、多摩キャンパスからの境川水系、法政大学女子高等学

校の立地する鶴見川水系との関連も視野に入れることができる。(注3)

このような事実から、法政大学エコ地域デザイン研究所は、2016年2月、大学教員と中学高校教員とで、「水系エコミュージアムとしての法政大学の立地」というタイトルのシンポジウムを開催した。そこでは各校地ごとに学校と水系とのかわりについて発表し、総体としての「エコミュージアム『法政水回廊』構想」の可能性について討論をもった。(注4)

このシンポジウムで、あらためて認識されたことは、学生や教員の活動として中学高校、大学ともに、濠や用水、池、河川と直接あるいは間接的に関わる何らかの地域活動を推し進めている姿であった。単なる位置としての水系のつながりだけではなく、地域活動という形で水系上において同期・呼応している姿であるといってもよいものであった。

外濠が法政大学市ヶ谷キャンパスの地元であり、広域にズームアウトしていくと見えてくる多摩川水系自体がまた法政大学の地元でもあるといえる。すべての事象がお互いに入り組みつつ、つながりを持っているというのが環境の一般的な基本的視点でもある。マイクロな地元である市ヶ谷の外濠が、実はそこにマクロな全体としての多摩川が含まれており、また他の校地のマイクロな地元と入れ子構造になっているということも見えてくるかもしれない。これら一つひとつの場における水系環境とのかかわり、そして全体の水系環境との関係を明示的にし、かつアクティブな学習の場ともすることができれば、一体となった「エコミュージアム『法政水回廊』構想」もイメージすることができよう。実は、法政大学には、期せずして、環境教育の壮大な装置が備わっているわけである。少なくともこのように、与えられた環境をあえて積極的にとらえ、再び目的的に編みなおしていくということも、それなりに意義あるものと思われる。

## 地元・郷土として外濠をみる

さて、外濠はそれ自体が文化財であり、史跡（国指定「史跡江戸城外堀跡」）にも指定されている。他地区ではごく一部を残して旧濠の景観の多くが近代の鉄

道建設や埋立てなどで毀損されてきているのに対し、市谷濠から新見附濠、そして牛込濠に至る間は満々と水を湛えた広大な旧い景観を今に伝えている珍しい地域である。そこでの石垣や土塁は構築当時の旧い姿のままといつてよい。明治以降、外濠は防御の役割から開放されて、人々の身近な場所になり、昭和初期には土手は公園（「東京市外濠公園」）として、一般人に開放され憩いの場となっていく。土手の桜は、明治以降に植えられたものであるが、大戦後になって地域住民有志の寄贈により植樹されたものも多くなりの本数に及んでいる。

このような、外濠の形や自然とともに、市民とのかかわりの歴史もまた興味深い。その一部を探るために、過去の新聞社会面記事を少し覗いてみよう。

まずはお濠の水の中。外濠には、魚がたくさん棲んでいる。かつて水涸れや工事で、それが市民の眼にはっきり見えることもあった。「外濠の水が涸れて鯉や鮒が跳ねる」（読売新聞、以下同新聞、大正12年8月）といったような記事がいくつかみえる。戦時下には、積極的に魚を飼育したこともある。「外濠に鯉を5万尾」（昭和16年5月）と稚魚を放流したのは九段4丁目会である。食糧増産のためであるが、水が十分肥えており餌は要らなかつたらしい。1年たち「獲物は大きいぞ」（昭和17年10月）と、大は1尺5寸（約50cm）にまで成長、それを陸軍病院や隣組に配給したという。

事故も多発している。人が落ちたり飛び込んだりした事件は多かつた。車ごと落ちる事故も何回かあった。珍しいのは飛行機が落ちた事故である。「民間機外濠に墜落」（昭和12年12月）。神田の洋服店の宣伝飛行中だった機が、市ヶ谷見附上空にさしかかった際、エンジンをストップを起こして濠に墜落。真二つになるも、乗員2名は奇跡的に生還した。「赤禪の勇士3名を救う」（昭和13年12月）という真冬の勇ましい美談もあった。タクシーが運転を誤り客ごとお濠に転落、すわ一大事、禪ひとつで凍りつくお濠に飛び込み救助したという立派な通行人の男である。

一方、なによりも市民の心を和ませたのが、風流な外濠の情景である。花見やボートは今に続いているが、「外濠の観月舟遊」（大正11年8月）と、初秋の宵に舟を浮かべ月を愛でる人も多かつたらしい。新聞記事には季節ごとに風情溢れる話題や、文化人のエッセーも多い。ある年の初夏には「外濠の水上演習」（昭

和46年5月)もあった。当地の地場産業である出版印刷業界の春闘で、15隻のボートが連なりジグザグ行進、のどかな姿が人々の眼を奪った。また、不埒ではあるが、外濠の水面は「殺生禁断の場所に釣を垂るる者あり」(明治25年8月)とその昔から釣り人には密かに人気があったようだ。(注5)

多くの話題が地元の人々の中に積もり醸され、地域の社会文化的な共通心象を形成してきた外濠。それらが地域への誇りや親しみに転じ、眼には見えない心の絆となっているとすれば、それを、聖なる「龍」に例えることができるかもしれない。

地域の一体性や活力、良環境は、成員間の信頼関係があって出来上がるものである。逆に、いわゆる共有地の悲劇という命題があるが、信頼関係なく利己が先んじ、結句、地域が荒れ果て、皆が損する構図である。

世の中に前者の良い例はいくつかある。皆が仲良く切磋琢磨する町や地域。相互の信頼に基づく温かいコミュニティが形成されている場合である。その方向は誰もが首肯し、それに向かい努力もされている。しかし、なかなか理想どおりにはいかないのが世の常である。

ところが、直接には信頼の構築が難しい場合でも、そこに龍がいれば、人々の間に強い信頼関係が成立することがある。皆が、聖なる龍を深く敬っている場合である。仮に相互に友人でなかったり、知らなかったりしたとしても、皆が愛し尊ぶ龍を媒介として、各自が間接的な信頼関係に至るという構造である。都内でも珍しく一体感に包まれ、情感に満ちたJR市ヶ谷駅～飯田橋駅間のお濠の空間と神楽坂などその周辺地域には、なにかそのような特別な龍が棲んでいるに違いない。

このような眼で「龍の棲む外濠」をみた場合、その聖なる龍の力をよりいっそう増大していくことが肝要かもしれない。それは皆が外濠をさらに深く強く愛するようなものにしていくことである。そのための具体的な方策は、水の浄化、景観の整備修復、親水性のグレードアップなどであり、季節に合った水面の積極活用もそれらに加えられよう。

水質の向上は急務である。構造的には、現在も合流式下水道の捌け口になっており、急な降水時には生活污水が雨水とともに流入して極度な悪臭を放つ大変な状

況になることがしばしばある。世界都市東京の真ん中にいつまでもこのような姿の放置が許されるわけがない。分流式への転換、環境用水としての別途河川水の導入等で、やればできることである。外濠通りがマラソンコースに予定されている東京オリンピックは、その構造改善の契機として期待されてよからう。

親水性の向上は以前から望まれていることであるが、現在までは十年一日の態で特に何も進んでいない。実際に水面に近づける場所としての限られた親水空間の例は、大正時代からある民間によるボート場兼カフェ等のみである。しかし、それら自体も現在において公有水面の管理者である都や区との間で見解が異なり、少なくとも行政側は協力する状況にはない。営業者側からすれば、ボート場などはもともと時の内務大臣そして東京市長であった後藤新平に依頼され私財を投入して造ったもので、苦労を重ねて今日まで維持してきたという自負がある。種々の意見はあるものの、ともあれ人気の場所の一つではある。水面を含めたお濠全体の利活用について、景観の保全や修復を含めてしっかりオープンに議論し、よりいっそう親水機能全体がグレードアップし、地域住民や都民がより楽しく愛する場にしていこうことが求められている。

外濠の土地所有、管理関係も、水面が国交省、土地が場所により財務省、東京都、千代田区、JR、および民間ときわめて錯綜しており、関連する法律も公有水面埋立法、鉄道事業法、鉄道営業法、都市計画法、道路法、都市公園法、下水道法、文化財保護法など多岐にわたりかなり複雑である。市民の側からの大胆な提案などもあるが、この状況下では良いアイデアも公式には議論以前の状態である。そのような場合こそ、地元の大学が大きな機能を発揮することが出来るかもしれない。郷土研究、地元研究としての格好の対象であろうと思われる。

事実、外濠においては、大学と地域住民や地元企業などが協働し、積極的に調査や活動等を進めている。その一つが「外濠市民塾」の広範な活動であり、外濠の未来を見据えて多くのイベントや現地調査を精力的に進めている。また、学生主体の企画・運営による活動として、「外濠の水辺環境に関するワークショップ」や、土手でのキャンドル・ナイトの演出「外濠キャンナール」、お濠に浮かぶボートをメインの観客席とした「水上ジャズコンサート」、さらには土手での七夕飾りや清掃活動なども活発になされている。それらの中には、既に長年に渡り継続



的に粘り強く続けられてきているものも多い。このような外濠と深くかかわる地域活動が続ける中から、新たに外濠の魅力の発見や、それらの皆での共有がはかられていくものと思われる。人と土地の関係性の中から、新たに地域の魅力を発見し地域を強固にしていくという地元学や、今日的な郷土学そのものの具体的実践の東京都心版といえよう。

## 地元・郷土研究のダイナミズム

地域内の小さな事柄を深く理解し新しい解決を探ることが、広い地域全体の問題を理解し地域を変革していくことにつながるかもしれない。また、地元の小さな事柄の中に、広い地域あるいは一国、さらには世界の事象が多分に含まれているとすれば、足元から世界が見えてくるかもしれない。環境教育やエコミュージアムの本来の目的にもつながる原理である。「木をみて森をみず」という格言がある。広い視野に欠ける様の意であり、その通りである。しかし、この言葉を逆に使い、「木をみれば森がみえる」という表現もまた正しいかもしれない。すべての事象が連関し、フラクタル性を備えているとすれば、それは真実であろう。より正確に言えば「木を『深く』みれば森がみえる」ということである。

この木と森の例えを、より実践的に言い直せば、「木を動かせば森が動く」ということになる。地域での小さな動きが、一国あるいは世界の明日を変えるということは、今や大言壮語ではなからう。世界が密につながり、一方で不安定な時代であればあるほど、いわゆるバタフライ効果といわれる急速な増幅現象が起こりやすいといわれる。ここにまた、地元・郷土研究、あるいは地元・郷土学の世界とつながるダイナミズムがある。さまざまな地域実践事例のお手本交換が盛んとなっている今日、地域固有のオリジナルな努力事例の中に世界性を持つものも現れている。例えば、田園地帯の「道の駅」の一つのオリジナル商品が、世界レベルの博覧会に出展され、諸外国のバイヤーの眼にとまることも珍しくなくなってきた時代である。「グローバル」な時代が今まさに眼前に到来してきているといえよう。

おわりに

地域研究の第一歩として、自分の身近な地元や郷土を知り、そして何らかの主体的かかわりを持っていく中に、地域がより深く見えてくるというのが、本稿の主題である。

自己との関係を持つことによって深く見えてくるのはなぜだろうか。それは、「当事者意識」の有無の問題であろうかと考える。当事者は、いわゆる評論家と違い、未来に対する責任の一端を担っている。したがって、当事者が未来を見つめる眼は現実的であり、複眼的・全方向的である。これに対し、一つ二つの得意な切り口から論評し、それで事足りとすることも多いのがいわゆる評論家である。本格的な地域研究は、やはり無責任な評論家であってはならないと筆者は思う。地域には生身の人間がいて、日々生活している。自然も文化も、一朝一夕に出来たものではなく、地域の人々が、先祖を含め、長いいわば死闘のもとに勝ち得たものである。その目線に立たないと見えてくるものも限定されるであろう。

このような姿勢が、まずは地域研究の基礎である。自分の地域研究を広げるには、その姿勢を持ったうえで、次に自分の新しい「地元」や「郷土」をつくり追加していけばよいかと思う。一方、地元学で最も嫌われるのは、そのような姿勢を持たないいわゆる「上から目線」の調査研究やコンサルティングである。本当のことはずっと住まなければ分からないかもしれない。しかし、短時日であっても、また、どこに行っても、自己との関係、つまり地元や郷土の姿勢を堅持する中に、地域の本質を知る機会が生まれるものと思われる。地域に共感し、できれば協働まで進む中に、本当の研究や調査、コンサルティングができるものと確信する。仮に、もともと地元人から見れば他所者であっても、地元である「土の人」の気持ちを、どれだけ深く知りうる「風の人」になりうるかであるともいえよう。

サン・テグジュベリの『星の王子さま』に次のような有名な話がある。自分が水をやり、風をよけたりして丹念に育てた一輪の気難しいバラ。不平や自慢話を聞いてやり、「ほくのもの」と呼べるようになった花。時間をかけて共通の体験を重ね、「なじみ」になった花。相手の喜びや悲しみが自分ごとになる。それを

気づかせてくれた友達になったキツネ。「ものごとを知ることができるのは、なじみになったときだけだよ」とキツネはいう。「『なじみになる』ってどういう意味なんだい？」の問いに、「それは、すごくなおざりにされていることなんだけど、つまりだな、『絆を結ぶ』という意味なんだ」、「おまえがバラのために時間を費やしたから、おまえのバラはとても大切なものになったんだ」とも教えてくれる。そのキツネは、別れぎわ、王子さまにとっておきの秘密をプレゼントする。「とても単純なことだけど、『ものごとは心でしか見ることができない』ってことなんだ。大切なことは、目に見えないんだよ」という言葉を。(注6)

さあ、じぶんの地元・郷土をつくりつつ、いっしょに地域研究の旅に出ようではないか。心の目を磨きつつ。

(注1) 法政大学エコ地域デザイン研究所編 『外濠 -江戸東京の水回廊-』  
2012年4月発行、鹿島出版会

(注2) 「地元学」は比較的あたらしく、国内外で地元学び、人・自然・経済が元気な町や村をつくるという活動を進めている吉本哲郎（地元学ネットワーク主宰）氏らが提唱している言葉でもある。（吉本哲郎著『地元学をはじめよう』2008年、岩波ジュニア文庫。同氏ほか著『地域から変わる日本 -地元学とは何か-』2001年、現代農業増刊、農山漁村文化協会）  
「郷土」は、もと農政学者であった新渡戸稲造や柳田國男の両氏らが、明治末期に地理学者ほかを交え研究会をもった「郷土研究会」のちの「郷土会」で頻繁に使われた言葉である。「郷土学」の重要性を訴えた一人は、同会に参加していた地理学者の小田内通敏で、「明治の末期に於て、郷土的研究の重要性を感じたわたくしは、ドイツ文学の専攻から地理学に転じた中目覚氏によって、ドイツのハイマートクンデ（郷土学）を知り、その萌芽を新渡戸稲造先生の『農業本論』に見出したのであった。かくして当時いまだ殆んど顧みられなかった『郷土学』に対し、『郷土会』の創設によって僅かにその渴を醫した。」と記し、「自然科学的考察と文化科学的考察との総合によって始めて達成さるべき郷土的研究方法の苗床としてのわが郷

土会」と郷土学が総合科学であることを謳っている。(小田内通敏『日本郷土学』昭和15年、日本評論社)

(注3) 法政大学の東京および近郊における校地は以下の通りである。

校地	面積(千m <sup>2</sup> )	近隣水系(河川・用水)
市谷	36	外濠、神田川、玉川上水
小金井	58	玉川上水、仙川、野川
府中	11	野川、多摩川
三鷹	28	玉川上水、神田川、井の頭池
多摩	723	浅川、境川、多摩川
川崎	105	二ヶ領用水、多摩川
鶴見	19	鶴見川

(2016年3月現在、校地面積は法政大学調べ)

(注4) 「水系エコミュージアムとしての法政大学の立地」シンポジウム(2016年2月28日開催)の発表および討論のテーマは以下の通りである。

- I. 問題提起 水系から見た法政大学校地の立地環境 (法政大学・石神隆)
- II. 各論
  - 多摩丘陵の水系と法政大学・多摩校地 (法政大学・馬場憲一)
  - 玉川上水・神田川と法政大学・三鷹校地 (法政大学中学高等学校・石川秀和)
  - 玉川上水と法政大学・小金井校地 (法政大学・出口清孝)
  - 水都府中の歴史と法政大学・府中校地 (法政大学・神谷博)
  - 二ヶ領用水と法政大学・川崎校地 (法政大学第二中学高等学校・大湖賢一)
  - 外濠と法政大学・市谷校地 (法政大学・福井恒明)
- III. 討論 「エコミュージアム『法政水回廊』」構想の可能性
  - コメント (法政大学・岡本哲志、同・長野浩子)
  - 総括コメント (法政大学・増田正人)

(注5) この項の新聞社会面記事については、前述『外濠』第2章に掲載の「新聞の社会面記事からみた市民の外濠」(石神隆担当部分)から抜粋した。

(注6)『星の王子さま』中の言葉については、『プチ・フランス(新訳・星の王子さま)』(川上勉ほか訳、2005年、グラフ社)のものを使った。同訳書での「なじみになる」の原本仏語は、“apprivoise”(英語版では“tame”)である。

この「なじみ」という言葉を場所との関係でとらえれば、「現象学的地理学者」の代表でもあるエドワード・レルフの「私たちの場所の経験には、社会の一員としても個人としても、この特別な場所に対する緊密な愛着、つまりここを知ることとここで知られることの一部である親近感を伴うことが多い。私たちの『根もと』を構成するのはこの愛着である。そしてそれに伴う親近感、詳しい知識をもっていることではなく、その場所に対する深い配慮とかかわりの感覚である」という、場所への愛着や親近感に近いものといえよう。(引用部分：エドワード・レルフ著『場所の現象学 - 没場所性を越えて -』高野岳彦ほか訳、1991年、筑摩書房)。その関係はまた、もう一人の「現象学的地理学者」の代表であるイーファー・トゥアンの使うキーワード「トポフィリア(場所愛)」に近いものであろう。それは、「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつきのことである。概念としては曖昧であるが、個人的な経験としては、生き生きとした、具体的なものである」。(イーファー・トゥアン著『トポフィリア』小野有五ほか訳、1992年、せりか書房)。なお、トゥアンによれば、「場所への愛着ができるためには時間が必要であるが、しかし、たんなる持続よりも、経験の特質と強さの方が重要である」と、場所との関係における経験の質に注目点が置かれている。(同『空間の経験』山本浩訳、1988年、筑摩書房)